

アルコールの摂取量などを含めて多方面から検討中です。

ところで、近年アルコール摂取が健康に有益な効果を示す医学研究報告がなされてきております。

では、最近発表されたアルコール(飲酒)と疾患との関係に関する新しい研究発表についてみていきましょう。

この研究は飲酒と心筋梗塞について検討したアメリカのハーバード大学のバイ助教授のグループが行った疫学的研究報告です。

研究の対象者は二十年以上医療関係の仕事に従事し身元の確かな約五万一千人の男性グループです。

このグループで心筋梗塞を発症した方がおられますが、そのなかで幸いにも約千八百人は心筋梗塞の発作から回復されました。

しかし、心筋梗塞の再発作は不幸な転帰にいたる率が非常に高く、再発作の予防は重要となっております。そこで、この人達のなかで詳しく飲酒歴を調査し飲酒量と心筋梗塞の再発作につ

いて検討しております。この再発作に飲酒がどのように関わっているかアルコール摂取量と再発率について研究されました。

嗜んだ種々のアルコール飲料に含まれるアルコール量を計算して、全くアルコールを摂取しないグループのC群、一日九・九グラムまでのS群、一日一〇から二九・九グラムのM群、三〇グラム以上飲酒のL群の四グループに分けて検討しております。

その結果をみてみましょう。飲酒しなかつたグループC群よりも飲酒群の三(S、M、およびL)群は心筋梗塞の再発率は低頻度でした。おおよそですが、心筋梗塞の再発率はC群が十人再発するとしますと、S群は七・八人、M群は五・八人、またL群は九・八人となります。特に、M群では再発は極めて低く抑えられておりました。つまり、一日一〇から二九・九グラムのM群に相当する飲酒量は心筋梗塞の再発を非常に低く抑えたことになり

この結果から、初めて心筋梗塞の発作をきたしたアメリカ男性は、心配しながらお酒を嗜まなくても適量ならば心配ないと考えられます。アメリカの愛飲家諸氏はアルコール量に換算してM群の一日一〇から二九・九グラムを楽しめることとなります。

さて、診察室で心筋梗塞から快復された方から心配そうな顔で飲酒について問いかげられることがしばしばあります。この研究成果より、適量なアルコールを嗜むのは可能ですと答えることができますようになりそうです。

また、本研究ではアルコールと心筋梗塞以外の疾患についても検討されており、詳細は省きますが、これらのデータも適度な飲酒は心筋梗塞を含めた他の疾患による不幸な出来事を減らすと報告されております。

なお、今回のこの報告は現在のとこるアメリカ男性に限定されており、今後、女性群、日本を含めたアジア人についての研究報告が待たれます。

アラビカム

中西美子



ユリ科オニソガラム属の球根植物
最初に出会ったのは、オニソガラム・
テイルソイデスという清楚な地味な花
で薄黄緑色のたくさんの蕾が円錐型に
ついていて下からだんだんに咲いてい
く主役にはなれそうもない白い花でし
た。オニソガラムという名前の響きが
怖そうなのですぐに覚えられました。
咲き方が似ていたのでアラビカムが
同じ仲間だとすぐ気づきました。オニ
ソガラム・テイルソイデスと比べると
アラビカムはひとつひとつの花も大き
くて、雌しべが大きな球状で黒く雄し
べの葯も目立つので白い花とのコント
ラストがとてもかわいいし花持ちも
良いので花東やアレンジメントに持っ
てこいの便利な花です。
以前はオランダからの輸入花材でな
かなか見つけられませんでした。今
では国産のものが出回っていて求めや
すくなりました。

カタカナ表記あれこれ



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

(文芸評論家)

日本語はむずかしいと思う。「ハイジン」と片仮名で書いたら、俳人を連想するか廃人を連想するか。「カジン」は歌人か佳人か。「ヘンシユウシヤ」とあれば、編集者か偏執者か。

私は、北海道生まれであるせいか、明確に言葉を区別して発音することができなかった。「橋」と「箸」と「端」の発音の区別がつかなかった。幼いときは舌がまわらず、カ行の発音がつかなかった。「コネココロコエンカラオチタ」(子猫ころころ縁から落ちた)

というのを「トネトトロコエンタラオチタ」と言っていたものだから、姉たちから笑われていた。

小学校入学のとき、親が学校に提出する身上書に「舌がまわらないので、授業中、なるべくあてないで下さい」と書いていた。親なりの気遣いなのだが、今でも記憶しているのだから、自分は普通の人より劣ることを認識させられ、少しは傷ついたのである。小学校一年生のとき、国語の教科書を家に忘れてきた。なにしろまだ純真

なときのこと。大変な罪悪感を抱き、とにかくこのことを先生に言わなくては、と思うものの、「コクゴ」と発音するのは至難の業。俯き、小さな声で「ゴクゴの本を忘れました」と話した。先生は私の小さな声がよく聞こえなかったものか、「エッ」と訊き直したが、二度目の「ゴクゴ」が分かったらしく、ただうなずいてくれた。

中学生のとき、国語の谷川隆重先生がよく「べんけいはなぎなたをもってやぐらのうえにたつ」(弁慶は薙刀を持って櫓の上に立つ)の文を引いて、読み誤りの例として教えていた。「べんけいはな/ぎなたをもって」と、切る部分を間違えて読む例として示してくれた。弁慶ぎなた式と称するものである。先生が「こういう読み方はいけません」と言っていて覚えてくれたもので、それを今でも鮮明に憶えている。

読み誤りや記憶違いはよくあることだが、特に私の場合、勝手に読み、平気で読み誤りをしている場合が多い。以前、金沢の青山克彌彌鏡花記念

館長から「今人気最絶頂のAKB……」と印刷したチラシが送られてきたことがあった。「AKBって何だ?」と思ひ、それを勝手に「アカブ」と読んだ。今はAKBなるものがどのような存在であるのかおぼろげながら分かっているが、メンバーの顔は一人も知らない。時流に鈍感なのである。

何かを勝手に自己流に読むようになったのは、生来のいいかげんな性格に原因があるのだろうが、学生時代、ドイツ語を中途半端に勉強したため、英語とドイツ語の読み方が頭の中でグチャグチャになってしまつたらしいのだ。また、その崩れた頭を自分なりに整頓しようとも思わない。天性、ズボラなのである。

固有名詞を自己流に読む、言い換えれば勝手に名前を付けていることになる。そのこと関係するのだろうか、あだ名を付けたり、名前を付けるのが好きである。家で飼っていた猫にデブ、シッポという名前を付けた。二匹とも捨て猫を飼つたのだが、デブは少しべ

ルシヤの雑種で毛が多く太つて見え、シッポとは普通の猫より尻尾が長かつたから。近所の人は、私の前では呼び捨てにせず、「デブちゃん」「シッちゃん」と「ちゃん」を付けて呼んでくれていた。二匹の猫が他界し、次に飼つたシヤム猫は、タラコ(鱈子)色をしていたので、タラと命名した。この猫は名前が気に入らなかつたものか、まもなく家出した。

片仮名の名前を好んで付けるのに、片仮名表記のものに対して、きわめて順応性がない。「レシビ」という言葉の意味を知つたのも近年のこと。むろん「トッピング」などという言葉の意味を知つたのもごく最近のこと。食堂で、料理を運んでくる人が「トッピング」というので、「トッピングって何ですか?」と訊いたら、一緒にいた某氏(編集者)が恥ずかしそうに苦笑していた。

ずっと昔、石川啄木の「頬につたふなみだのごはず 一握の砂を示しし人を忘れず」という歌を「なにだの

ごはず」と印刷された本を読み「ごはず、つて何だ?」と疑問を持ったまま記憶していた。やがて大学に入り、同じクラスになった男もやはり「ごはず」と記憶していた。おそらく級友も同じ誤植の本を読んでいたのであろう。よく言われることだが、澄むと濁るとでは大違いである。「ハケ(刷毛)に毛があり、ハゲ(禿)に毛がなし」とはよく言つたものだ。

流行語というものに鈍感だから、たとえ新造語や奇妙な言葉に出会つたり、誰かが特殊な言葉を使つたとしても別に何とも思わない。テレビなどで「おいしい」と表現するのを「これはヤバイですよ」という人がいる。「ヤバイ」という言葉の使い方が違う」と怒つた小説家が出たが、私自身はさほど気にならない。

時流・流行語に鈍感なくせに、方言は好きである。私にとつて旅の楽しみとは、その地方々々の方言に心を和ませられることにある。



天野神社の大獅子。最大の大きさを誇る。
目が光り鼻からはスモークがでる。

三木の 大獅子

香川に伝わる伝統大獅子

三木の 大獅子

古来、獅子は招福驅邪の象徴。頭には霊力があり悪を食べてくれるとも言われている。香川県三木町に伝わる三頭の大獅子は、その中でも飛び切りの大きさとし力を誇る。各地区に伝わる大獅子を中心に人々が集い、秋の豊作を祈る祭りは毎年十月の第二土曜日に開催される。歴史と伝統の鰐河神社の大獅子、華麗で豪華な水上八幡神社の大獅子、スケールの大きさに圧倒される天野神社の大獅子。三者三様の物語を紐解く。



水上八幡神社の大獅子。鼻と牙に特徴を持つ。
油単の美しさも見逃せない。

鰐河神社大獅子

三木町指定文化財

昭和60年3月23日指定

黒く独特の雰囲気を持つ鰐河神社の大獅子は、頭をいれる箱に安政5年の箱書きがあることから、約150年余の歴史をもつと言われている。

その頃、日本ではコレラが流行り、安政の大獄など社会情勢も落ち着かないことが多かった。

三木町は村相撲の盛んな土地柄で、村力士の宮川某の夢枕に「獅子を作つて神社に奉納せよ」のお告げがあり、三木町新開の人たちは竹を組み和紙を短冊状にちぎつて何層にも重ね、走つて操れる獅子としては最大の獅子を作り上げた。現在の獅子は3代目になるが、当時の手法を忠実に守り伝えている。



氷上八幡神社大獅子

昭和63年から平成4年まで、4年の歳月をかけて串田茂樹さんとその父上によつて作られた氷上八幡神社の大獅子。油単は京都の手描友禅師林田清龍氏によるものだ。

幅6メートル強、長さ20メートルの美しい油単が悠々と風に流れる華麗さは群を抜く。

大獅子はただ大きいだけではない。いかに軽量化するか工夫が重ねられ、串田父子の残した資料によるとグラスファイバーやFRPだけでなく、新聞、和紙、蚊帳などもつかっている。

獅子を守る地区の名をとって、重元・石ヶ坪の大獅子とも呼ばれる。





天野神社大獅子

昭和3年、昭和天皇ご即位の御大典記念行事として平尾地区の有志によって作られた天野神社の大獅子は、二度姿を消していたが、昭和63年復活する。

重量320kgは、三木の大獅子の中でも最も重い。頭を扱うのに20人、うしろに40人、尻尾にも数人を要し、60人以上の人たちによって引つ張られる。

平成17年文化庁から地域伝統文化伝承事業に認可され、架台の制作、頭の補強修理、塗装修理を加えた。

天野神社の大獅子の目は光り、鼻からはスモークを出す。そのスケール感は一ときわ目を引く。



鰐河神社

代表 安西弘さん



歴史ある獅子への誇りをもつて

豊玉姫伝説の神社として有名な鰐河神社ですが、私にとっては子ども頃の、学校から帰ると遊びにいった地域の守り神木にのぼったり野球をしたり、運動会の子選や練習もここでする生活に密着した神社でした。鰐河の大獅子は新開地区56軒で守っていて、子どもがいなくても多いのですが、祭りのころになると若い人たちが集まってくれますよ。大獅子はみんなの誇りなんです。



鰐河神社／ことでん長尾線白山駅より南へ歩いて15分。



天野神社／三木町平井小学校より北東へ歩いて5分ほど。

子どもたちも一緒に獅子を守る

天野神社では年中行事として年末にしめ縄づくりをするので、その藁を調達するために餅米を作っているんです。子どもたちと稲刈りをして、今年も12月5日一緒に餅つき大会をしました。ですから、祭りのころ小学校に声をかけるとすぐ40〜50人の子どもたちが集まってくる。担ぎ手が足りないときは子どもたちのお父さんをお呼びする。神社の氏子を中心にみんなで獅子を守っています。

天野神社

代表 宮井忠さん



氷上八幡神社
代表 熊野正美さん



うちの獅子は、ほればほれしますよ

大獅子に人が向かってくるような気がするんです。祭りの前までは知らなかつた人も一緒に油断の中にはいることで親しくなり、会話が生まれ、町のことや獅子の歴史や地域の人たちのことがわかる。親しく食事もするようになる。獅子がまちの人たちを繋いでいっているんですね。うちの獅子はほんとに美しい。昔の人たちはお金をかけず良いものを作ろうと工夫する知恵をもっていましたね。



氷上八幡神社／三木町氷上小学校から南へ歩いて15分ほど。

自分自身の救助



志し村むら栄よし守もり
(評論家)

いわゆる就活という難関が、今の若い人には立ち足はだかるといことは承知していた。

しかし、刻苦勉勵の末に得た職場を、わずか数ヶ月で去る人がかなりいると言う。若い時には、困難な状況を経験せざるを得ない、いわゆる人生のパターンというものはある。

だからその時、何を頼るか、このことは大きな岐路を前にすること、そのものだろう。

小林秀雄は、その社会的地位を確立した後の『富永太郎の思ひ出』でこう書いている。

「富永太郎は二十五歳で死んだが、僕は二十四歳であった。死ぬ前の年の秋に彼が書いた散文詩は「私は私自身を救助しよう」という文句で終わって

ゐるが、(中略)青春のエゴティズムは二人に共通のものであった。僕の専念してゐた事も亦恐らく自分自身の救助であった(以下略)。

そしてそのラストがすこぶる人間的だ。

「彼が死んだ時、僕は京橋(東京都内)の病院にゐて手術の苦痛以外に何も考へてはゐなかつた。間もなく僕はいろいろな事を思ひ知らねばならなかつた、とりわけ自分が人生の入り口に立ってゐた事について」。

真つ正直な青春の一ページとは、まさにこういうものだろうと思う。それはそういうことなのだが、この「いろいろいな事を思ひ知らねばならなかつた」が、後の『アラン』「大戦の思ひ出」の以下と呼応する。

「僕は彼等(アラン、ヴァレリイ、ジイドを指す)の著書を、学生時代から読み、彼処を理解し、此処を理解し、といふ風にいろいろ多くの事を学んだが、最後のものを学ぶには、ずいぶん時間がかかった。」

さて、あの小林が、いわゆる「青春の蹉跌さつとつ」大いなるつまづきの渦中にあつたと思われる頃、別言すれば「自身の救助」に懸命であつた頃、一体、何を見て、何を思つたのか、もちろん、傍人は忖度そんたくの域を出ないわけだが、見当をつける必要がある。

それには、『批評家失格Ⅰ』でこう書くところが、参考になる。「ほんとと言へば、浮世の長い辛苦だけが、この言葉の秘密を明かしてくれる」として、理屈はどうにでもつくを挙げて、このように書く。

「理智は何物をも改変しない。批評の困難は理智の逆説性の利用に他ならぬ。」

理性・知性、論理的思考、言葉の響きは素晴らしいが、「自身の救助」にお

いて、それらがはたしてどんな力を發揮して助けてくれたであろうか。一人の人間の内面で、鮮やかな逆転が起こった瞬間が、ここに想像される。

では、それらに代わって、「自身の救助」に係わったこととは何か。ここに「直接経験の世界」という言葉が浮上する。生きる最前線で肉眼が見る以上の何か、例えば、心眼が目覚めて超人間的存在を感じする、そんな感性の持ち主はいる。ここでそれを執筆時の小林に仮想してみると、世間一般との差異は明白で、文章解読上の曲解の素因もそれかとなる。

しかし、そんな発想に嫌悪を覚える人も、広い世の中にはいるわけで、話は単純ではない。ともかく、小林は前者の典型のような人であった、と思わざるを得ない。そんな感性の人が、若年時の試練をクリアするのに力となった発想を、魂に刻印しなかったはずがなく、その後、畢生のテーマと化したこと、これも十分、考えられることではあるまいか。

世の中には、青春のエゴイズム、自己中心の生活から一転、利他主義、他者とか社会への奉仕に生きる人もいる。また、自堕落な生活に訣別し、逆に自己修養とか思索を生涯のテーマとする人もいるかも知れない。

しかし、小林を同列に見ることはできない。『安城家の兄弟』（小説と同名の評論）で、辛辣なまでにこう指弾している。

「ここで私のいふ不幸とは物質的不幸もささぬ、又、自己解剖癖とか自己修養癖とか思索癖といふ様な、洒落た高級な精神的不幸もささぬ。」

では、自身はどこへと歩を進め、何を確信したのか。と言うことは、「最後のもの」とは何を指すか？と質すこととはほぼ同義でもある。しかし、これが少しばかり難儀なのだ。複雑とか深遠だからではない、実は逆なのだ。「どんな個人でも、この世に足跡を残さうと思へば、何等かの意味で自分の生きてゐる社会の協賛を経なければならぬ。言ひ代へれば社会に負けなければ

ならぬ。」

これは『Xへの手紙』にあり、引用した覚えがある。なぜ再度、引くかと言へば、これがキイフレーズと言えからだ。

意外なことを書くようだが、小林が、その根底を露骨でストレートに吐露したところはごく少ないと思つている。

同著に加え『断想』『新人Xへ』は、その意味で稀少このうえない隠れた名著だ。それぞれに、以下はある。「ドストエフスキイは矛盾を解決しようと工夫したのではない。解決を工夫するくらいなら、矛盾に殺された方がましだと思つたのだ。」「確かなものは覚え込んだものにはない。強ひられたものにある。」

「社会」の異名が「矛盾」であり、「矛盾」の異名が「強ひるもの」であること、これを見抜くささやかな感性のゆらぎ、その一瞬、この思想の秘密を見た気がした。以後、これが文章に表立つて姿を見せないことを思うと、この三作の尊さが心から消える日はない。

同窓会

オリンピック

クの年は中学の同窓会をやる。そういう集まりには私は参加した事がない。友人の亘がしつこく電話をくれるもので行くと行ってしまった。当日

は朝から落ちつかない。特に会いたい女性が何人かいる。別に私は下心はない。卒業して四十五年は経つ。どうせ皆六十のババアである。

会場へゆくと見たような顔がある。誰かはわからない。受付にいる久雄は



佐川 毅彦

中学のままの顔である。会費を払い、大広間にゆくと、たくさんの人が来ている。昔の顔を残した者が多い。知った顔を見つけると声をかけるが、すぐ私とは分かってもらえない。ビールを手にも男女と話しながら、まわりの女性を見る。が、髪型か化粧のせいかどのどなたかさっぱりわからん。舞台上では琉踊などをやっているがほとんど観ていない。美人とオデコの女性が近づいてきた。オデコは伊波京子で美人の方は名を聞いてもわからなかった。

しかし、女性の方が男よりかなり若くみえるのはなぜだろう。ぜひ会いたい女性が何人かいる。会場を借りている時間は限られている。なんとか頑張らねば。私は母の介護で疲れ果て顔色もかなり悪いのでゾンビのように見え

るのではないだろうか。しかし気にしている場合ではない。努力の甲斐あってチカ子、ルリ子、良枝に会えた。そしてゴリ子はどうでもよいとしてあと一人肝心の人、菊枝さんほどこだ。亘に聞くと先ほど見たという。そこに案内してもらおう。菊枝さんは最初、私が誰なのかわからないようだった。担任の先生や同級生の事などいろいろ話しているうちになんとか私を思い出してくれたようである。よかった。会えて良かった。話せてよかった。参加した甲斐があった。

そして、同窓会はお開きになり会館を後にした。二次会のカラオケへとタクシー乗り場へ向かう出口の所に三人の女性が立っていた。その中に見覚えのある人がいる。幼い頃から体の不自由なノリ子だ。一人の同期生が彼女を見つけると感激して抱きついた。私は立ち止まりそれを見ていた。誰かにせかされて私はタクシーに乗った。

大坂が生んだ才覚の人西鶴



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

かえ名よばれて……

並べて見るのもナンだが、ぼくよりちよど三〇〇年前に生まれたサイカクのが少々気になる。もちろん『好色一代男』『好色一代女』『日本永代蔵』『本朝二十不孝』など浮世草子の作者として知られる井原西鶴（一六四二～一六九三年）のことである。『好色一代男』の冒頭はこう書かれている。

〈桜もちるに嘆き。月はかぎりありて。入佐山。爰に但馬の国。かねほる里の辺に。浮世の事を他になし。色道ふたつに。寝ても覚ても。夢介と。〉

この理解には、もっぱら吉行淳之介訳『好色一代男』の世話になっている。吉行訳ではこうなる〈桜とか名月とか

いっても、花はすぐに散り、月はやがて山のうしろに入佐山で、あっけないことである。兵庫の或る銀山のほとりに、憂き世のことはもう結構と、寝ても覚ても女色男色そればかり、「夢介」と遊里で異名をとった男がいた。〉この夢介が三人の太夫を身請けして暮らしている内に生まれたのが、主人

公の世之介。七歳の時に、その道に目覚めて以来、〈その生涯で、たわむれし女三千七百四十二人、小人のもてあそび七百二十五人〉とは〈よくもまあ命があったものだ〉。羨ましいというよりは、思わず笑ってしまう。世之介には、親から途方もない遺産も転がり込んで、さらに遊びを加速させるのだから読者の楽しみは広がるばかりだが、この世之介、結構みつともなく、哀れを催す場面が少なくない。いわゆるカッコイイとかモテモテとは少々異なるのだ。そしてこれはいわゆる「春本」ではない。世之介が各地の遊里を巡り歩いて得た情報を集めた「諸国遊里評判記」といったオモムキである。

『好色一代男』が大坂思想家橋の荒砥屋からはじめて世に出たのが天和二年（一六八二年）。たちまちベストセラーになったというから凄い。凄いといいたのは、執筆した西鶴はもちろん、これをベストセラーにした読者も実に凄くと思う。西鶴は、源氏物語を下敷きにしたとも伊勢物語に習ったとも言わ

れているから、それなりの当時の知識がないと理解もままならないし、文体は俳諧に根差した独特で難解なものだ。江戸時代前期の庶民の身に付けていた教養がいかに高かったかが分かる。

西鶴は、もともと俳諧師として頭角を現したことはよく知られている。俳諧師としての成功と挫折を経て、浮世草子の作家としての道を鬼のように求めたとは藤本義一氏の小説『元禄流行作家―わが西鶴』からのイタダキ。十五歳で俳諧の道へ入って二十二歳で早くも点者にまでなつた鶴永（後の西鶴）は、とにかく目立つことが大好きで、忝拔で滑稽な衣装でも評判だった。ために「阿蘭陀流」とも呼ばれたが、常に心がけていたのは、「俳諧は、雅（みやび）の道やない」であつた。庶民を常に意識していた。これが後の浮世草子執筆にも生かされた。公開の席に多数の観客を集めて句を詠み続ける「矢数俳諧」もお気に入りだつた。

一日一夜一六〇〇句の矢数俳諧という興行を成功させると、俳諧師引退、

浮世草子作家となる決意を込めた興行では、なんと二万三五〇〇句！三・五秒から四秒に一句を詠むという、書記役も書き残せないほどに「吐きつづけた。小用の時間も惜しんでのことだつたから、西鶴の膝許はびつしよりだつた。俳諧師の座を守るためには家庭も全て放り出してきたし、「女狂い」「帮間」とも言われた。

この間、食うために書いた役者評判記が売れに売れるが、西鶴には恥じる面も少々あつた。「墮落」とまで言う書肆も出てきた。西鶴自身「世之介」を書き進める内で「今までの俳諧の粹は、あまりにも狭かつた」と気付くのだ。そして『好色一代男』執筆にあつて、「もし、これで失敗やつたら、それこそ地獄の底や。もう、どないにあげいても、這い上がつて来ることは出来へん」という覚悟の下に取り組む。西鶴自身の体験がユーモラスに生かされていることは間違いない。

藤本氏が『元禄流行作家』で強調したかったのは、西鶴を生んだのは〈大

坂〉という土地そのものであつたかも知れない。〈町人商人の巷である大坂で、なによりも必要なことは、目立つこと〉。俳諧の席で、銭金の話題が持ちきりなのは〈大坂の地以外に、：現われてこないだろう〉し、〈大坂ちゅう土地はな、かたちのあるもんとか、資本のかかつてるもんに、客は銭をはらうけども、そうやないもんに、金輪際、銭は払わんちゅうことを憶えておいてや〉。西鶴は、その大坂で俳句をやるうという人に財布の口を開かせるのが俳諧師の指名だという。そのためには才覚を働かせるといふのだ。〈地方で地位と名譽と財産を得た檀那に、俳号を授与するといふ金儲けの口〉も考え出す。「興行で名を残した俳諧師・伊原西鶴で結構：」と語つた西鶴に、「そのために、わしには大坂という土地が、どないしても要るのや」と言わせている。

西鶴は、大坂が生んだ才覚の人でもあつた。

猫は鰯をくわえる



片岡義男

(作家)

いまから三十年ほど前、まだ鰯が大量に収穫され、その多くが飼料になっていた頃、漁港を見なくなった僕は東京駅から電車に乗り、千葉県の銚子港までいつてみた。寒くも暑くもない、薄いウールのジャケット一枚で快適だった季節、銚子港は人影なくもの静かに横たわる漁港だった。

僕はひとりで港のあちこちを歩きまわった。漁港はいたるところが漁港であり、そのことを僕にはたいそう好ま

しく、僕は港で充実した時間を過ごした。最後に岸壁まで戻って来たとき、一隻の鰯漁船が横づけとなっていて、クレーンでその船から岸壁のトララックへと、鰯が陸揚げされていた。大きな網のなかに大量の鰯がきらめき、船からトララックへと空中を移動し、トララックの荷台に網のなかの鰯は解放されていた。

何匹もの鰯が、トララックの荷台から岸壁へと、こぼれ落ちた。二十四匹、

三十匹とあったのではなかったか。その場にいた人は僕だけであり、僕はただ見ていただけだったから、岸壁にこぼれ落ちた鰯を拾い集めたりする人は、どこにもいなかった。落ちた鰯は、おそらくそのままに放置されていたのではなかったか。船の上に乗組員の姿は見えず、トララックには運転する人がいたはずだが、その人も姿をあらわさなかった。やがて陸揚げは終わり、トララックは走り去った。

岸壁に散らばっている何匹もの鰯を見ていた僕のすぐそばを、大きな猫が一匹ゆつくりと歩いて、一匹の鰯へと近づいていった。そして鰯に顔を寄せて匂いをかき、おもむろにその鰯の口に横くわえた。そしてその猫は僕のそばをおなじようにゆつくりと歩き、どこかへと歩み去った。そのときのその猫の顔を僕は見た。今日もまた鰯か、という顔をしていた。それもまたしかたないか、という表情で、鰯をくわえた猫は僕のかたわらを歩いていった。あの猫のその日の夕食は、漁港の岸壁

でくわえて来た、一匹の新鮮な鰯だったのだろう。

いま僕が住んでいるところにはスーパー・マーケットがいくつもある。電車でひと駅だけいくと、そこにはいはばんな大きなスーパー・マーケットがあるから、初冬のある日の午後、僕はそこへ行ってみた。広い店内の棚をめぐる歩き、ベット・フードの棚を見つけ、そこでキャット・フードを観察してみた。鰯はひよつとしてキャット・フードとして缶詰になつていてのではないかと、僕は思ったからだ。僕のもの思いはどうやら見当違いだったようだ。キャット・フードの缶詰の材料は、鮪（まぐろ）あるいは鰹（かつお）であり、鰯のキャット・フード缶詰はひとつもなかった。鰯はその収穫量が激減している、という話を聞いてからすでに十年はたつように思う。

鰯はおそらく収穫量が減つたままなのだ。鰯はかつてはきわめて大衆的な魚だったのだが、いまでは収穫される量が少ないから、高級な魚となつた、

という話を聞いたのも十年ほど前のことだ。いまでは鰯は猫まではいきわたらない。漁港の岸壁にのっそりとあらわれ、落ちている鰯を一匹横ぐわえて、今日もまた鰯か、という顔をしてどこへともなく消えた猫は、漁港へいきさえずれば鰯を食べることの出来た猫たちの、おそらくは最後の世代の一品だった。

僕の命運は猫とおなじようなものだろう。いま銚子港へいけば、岸壁に何匹も落ちている鰯を拾つてジップ・ロックに入れることは無理としても、鰯料理をさまざまに食べさせる店で昼食や夕食を楽しむのはまだ出来ると思う。漁港へいかなないのであれば、スーパー・マーケットの棚のあいだをさまざまに他ない。キャット・フードに鰯の缶詰はないことを確認したあと、僕が人が食べる鰯の缶詰を探してみた。そのスーパー・マーケットの他に二軒の店によつて、僕は鰯の缶詰を十一個購入した。その十一個がいま僕の目の前にある。

もつとも基本的なものは、オリーヴ油に漬けた鰯、つまりオイル・サーディンだろう。これが二個ある。もうひとつは、米油に漬けたものだ。「日本近海で獲れた鮮度良好な鰯をエキストラバージンオイルと塩のみで仕上げました」と、説明書きがある。いままぐにでも食べたい。ヴェランダで昼寝をしに来る猫に分けあたえたら、食べてくれるだろうか。

鰯の蒲焼を缶詰にしたものが、ふたつある。蒲焼があ、と僕はいささかの感銘を受けとめる。「特別のタレをていねいにつけ焼き、格別の風味と照りが違います」と、缶詰の蓋に印刷してある。鰯の梅しそ風味。鰯のレモン・スープ。鰯の信州味噌煮。味つけ鰯ともいうひと缶は、鰯の砂糖と醤油で味をつけたものだ。鰯のうらごしトマト煮、という缶詰もある。楕円形ではあるけれどひとまわり大きいサイズの、鰯味付、というのものもある。味とは砂糖、醤油、そして生姜だ。どれかひとつを選んで、口に横ぐわえてみたい。

癸巳元旦

坡中解語花坡中解語の花

路下兩頭蛇路下兩頭の蛇

陰徳招陽報陰徳陽報を招き

色荒傾漢家色荒漢家を傾く



今年の干支は癸巳なので、今年も年賀状には蛇にちなんで、「癸巳元旦」と題する五言絶句を作詩して送付した。

蛇にちなむ詩語としては「蛇足」程度しか思い浮かばなかったが、戦後の漢文の教科書に「叔敖の陰徳」という話があって、この話の中に蛇が登場することを思い出した。

教科書の内容をそのまま読み下すと

次のようなものである。

「楚（中国の国の名称）の孫叔敖は児たりし時、嘗って出でて遊び兩頭の蛇を見、之を殺して埋む。還るに及んで憂へて食はず。母、其の故を問う。叔敖、泣いて対へて曰く「兩頭の蛇を見る者は死すと聞く。向者に吾、之を見たり。恐らくは母を去つて死せん」と日無からんと。母曰く「蛇は今、安ずくにか在らん」と。曰く「児、後

山西 靖彦

人の又、見んことを恐れ、已すに殺して之を埋めたり」と。母曰く「吾、陰徳有る者は必ず陽報有りと聞く。汝は死せず」と。長ずるに及んで、莊王（楚の王）其の賢なるを聞き、迎えて令尹（宰相に相当）と為せり。」

この話の典故は、「日記故事」で、その中の「徳報類」に「埋蛇不死」と題してでている。

この当時、頭が二つある奇形の蛇を見たものは即座に死すとの言い伝えがあつて、それを叔敖が路上に見たのである。この時の叔敖が何歳であつたかは定かでないが、両頭の蛇を見たために自分が死ぬことは仕方がないとして、後から来る人が見ることがないようにと地中に埋めてしまふとは、大した子供である。また、叔敖の話聞いた母も、おそらくは「両頭の蛇を見る者は死す」という言い伝えを迷信と理解していたのであろうが、「迷信だから心配せずともいい」とは言わずに「陰徳有る者は必ず陽報有りと聞く。汝は死せず」と誉めたのは立派である。

この中の「両頭蛇」を基本に用いて、「蛇」と同じ麻韻で平仄の合う対語として「解語花」を選定して作成したのが右の漢詩である。

「解語花」とは、「言葉を理解する花」という意味で、一般的には美人のことをさしているが、典故は唐の玄宗皇帝が、寵姫の楊貴妃と太液たうきよの池に咲く蓮の花を鑑賞していたとき、楊貴妃のことを「蓮の花よりも解語の花の方が美しい」といった故事による（開元天寶遺事）。

名君といわれた玄宗皇帝は絶世の美女楊貴妃との色欲に溺れ、政治を省みなくなつて国が乱れ、安史の乱（安録山と史思明の反乱）を招いた。皇帝達が長安から蜀へ落ち延びる途中、兵士の不満から楊貴妃は殺され、その遺体は「馬嵬（陝西省興平県の西）の坡下（堤の下）泥土の中」に葬られたという（白居易・長恨歌）。

起句は楊貴妃が泥中に葬られたことを、また承句は叔敖が両頭の蛇を埋めたことを対句仕立てに詠じている。

転句は叔敖の母の言葉を平仄を整えてはほそのまま用いた。

結句は長恨歌の最初の句「漢皇色を重んじて傾国を思ふ」を踏まえた。

「漢皇」とは漢の皇帝のことであるが、長恨歌では唐の玄宗皇帝のことである。白居易は玄宗皇帝を直接さすことをはばかって、漢皇と称したものである。本詩では特にはばかることはないが平仄の関係で「漢家」を用いた。

「傾国」とは国家を傾けるほど絶世の美人のことであり、「色荒」とは、女色に迷い溺れることである。

毎年のことであるが今年も、全体が対句仕立ての全対格の詩であり、また、通常五言絶句は起句には韻を踏まないが、これも例年のとおり「花、蛇、家」と起句にも韻を踏んだ麻韻の詩である。

さて、「癸巳元旦」の詩にちなみ、色欲はともかくとして種々の欲望はひかえめにし、そして人知れず善行を行うような心がけて、この一年を送りたいと思う。